

走り出したIRをいかに定着させるか - 千葉大学学術成果リポジトリの場合 -

千葉大学 阿蘇品治夫
Asoshina@LL.chiba-u.ac.jp

平成17年6月22日

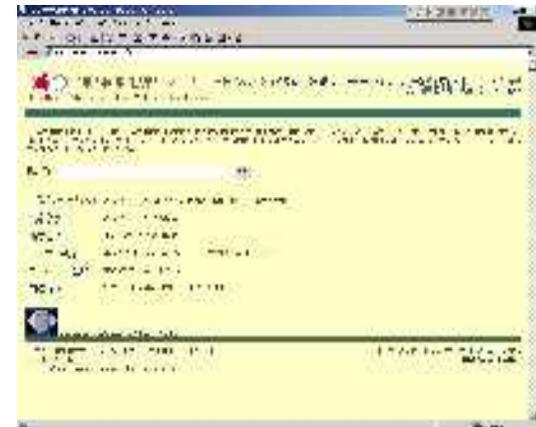


本日の内容

- 最近の動き
- 運用開始後の目標
- 学内への普及定着活動
- 業績管理系システムとの連携
- コンテンツ確保の目論見
- まとめ

基本事項

- 名称：
千葉大学学術成果リポジトリ
愛称 CURATOR
- 収録コンテンツ： 約800件
- システム構築：
平14年度プロトタイプ完成。改良を加え
現在に至る。独自開発。
- 国際登録：
OAIサービスプロバイダ登録、 IAR登録
- URL
<http://mitizane.LL.chiba-u.jp/curator/>



平成17年6月22日

最近の動き

1～2月	学内Green論文依頼の試行 国内学会著作権方針調査 研究教育評議会で「運用指針」承認 => 正式運用開始
3月	第1回学内説明会開催 学術情報発信専門委開催
4月	第2回学内説明会開催
5月	新メンバによるWG開催
6月	業績系システム連携検討 各学部に対しNII紀要電子化への積極応募要請
7月	本格公開 (8月 Ticer参加)
9月	シンポジウム開催予定

平成17年6月22日

運用開始後の目標

- 中身が増え続ける「活きたIR」を目指すべし。
 - ✓ 凍結IRでは旧来の電子図書館と同じ。
 - ✓ まずは量(例えば紀要)。次に質(Greenで埋める)。
- 目標実現のため、次の活動を軸とする。

学内教員へのIR普及・定着活動

登録コンテンツの継続的確保

学内教員への普及・定着活動

■学内一斉説明会

- ✓よほど動員できなければ効果は薄い。
- ✓しかしやることは大事かもしれない。

■学部 / 学科 / 個人への個別説明

- ✓図書委員会等に押しかける。
- ✓各学問分野のニーズを掴むチャンス。

■大上段からの「講演会」

- ✓世界的潮流の一端であることを理解してもらう。

先生方のリアクション

取合えず登録申請
消極否定に転落させない！

OA精神に共感
図書館の味方
連絡を怠らない！

消極肯定派

積極肯定派

消極否定派

積極否定派

面倒そうなので拒否(無視)
負担が少ないと理解させる！

様々な懸念から拒否
積極肯定に転じる可能性有り！

IRのデメリット by 積極否定派

■ 積極否定派の意見(例)

- ✓ Green誌だけが自分の業績を受け止められると困る。主要論文はGray誌に掲載。
- ✓ 著者版と出版社版との乖離が気になる。内容的に不十分な著者版は出たくない。
- ✓ IRについて全学的な登録体制が整備されないと、非常に中途半端なものになる。

教員共通の思い

- 肯定派・否定派問わず最も多かった意見

業績情報をこれ以上重複入力させるな！

- ✓ 大学評価用、ReaD用、Webページ用、科研費申請書用、等。確かに教員は何度も業績情報を入力or手書きしている。
- この不満の解消を織り込めば、有効なソリューションとなり得る、多分。

業績管理系システムとの連携

- 全学共通の業績管理システムを今年度構築
- 「大学アイデンティティとしての研究業績」という観点に立つ
- IRに業績情報を「流し込む」ルートを作る
- IRと業績管理システムの連携で以下を実現
 - ✓ 業績情報入力の手間軽減
 - ✓ 研究業績そのものの積極開示にもつながる
 - ✓ IRインタフェースへの直接入力がほぼ不要に
 - ▶ ただし、メタデータ補完、Greenチェックや論文本体ファイルの入手といった図書館の作業は発生する。

業績管理系システムとの連携

業績データの登録

全教員による業績データ(人物情報・業績情報)の随時更新・蓄積



【参考】

千葉大学の研究業績数

2000年 1,105件
2001年 1,098件
2002年 1,212件
2003年 1,218件
2004年 1,220件
直近5年 5,853件

”Web of Science”より計数

活用

評価

大学評価用提出資料作成

ReaDへの一括登録

広報

千葉大研究者DB作成

情報発信

リポジトリとの連携

Greenチェック



教員から論文電子
ファイル入手

平成17年6月22日

コンテンツ確保

■ 登録対象コンテンツ 4種類

Green誌掲載論文

学内紀要掲載論文

博士論文等

その他(発表資料等)

- ✓ Self Archiving SA はあくまで「理想」
- ✓ 各コンテンツごとに確保する算段を練る
- ✓ 遡及分、カレント分、バッチ登録分 等考慮

コンテンツ確保の目論見

	カレント	遡及
Green	業績DBからメタデータ転用 著者版ファイルを著者から入手 =>流れを作る。数100件/年	WoS, SCOPUS等により業績抽出 短期間に著者版を掻き集める予定 =>約2万件からGreen抽出
紀要類	ボーンデジタル化を図る オーバーレイジャーナルへ =>1誌試行開始	NIIによる紀要電子化支援を活用 =>平17年度が勝負 (現在電子化率13%と低調)
博論	部分的に提供ルート確立済 =>提出率約4割(義務でない) =>全学に広めるべき(未着手)	全学の研究科に依頼(未着手)
他		

■ 図書館が動かないとコンテンツは増えない

✓ 当面だけか、将来的にもか……。

平成17年6月22日

大学に定着させるためにすべき事

- 大学という機関の仕事として大学に認めさせる
 - ✓ 図書館だけで取り組んでいる限りは「試行運用」
 - ✓ 大学アイデンティティとしての研究業績という観点が大重要
- 学内への普及・定着
 - ✓ しつこい広報で味方を増やす
 - ✓ IR単体ではなく、業績管理系に連携（従属or一体化）するシステムとして定着を図る
- コンテンツ確保
 - ✓ 図書館主体で確保に向けて動くべし
 - ✓ Self Archiving への過度な期待は禁物